

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 4 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770007

研究課題名（和文）アリストテレス倫理学における道德知覚とその現代的意義の研究

研究課題名（英文）Moral Perception in Aristotle's Ethics and Its Contemporary Significance

## 研究代表者

立花 幸司 (Tachibana, Koji)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：30707336

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：道德知覚とは、アリストテレスが倫理学の中で提唱した考え方である。現在では、徳倫理学のもつ一つの論点であるが、さまざまな議論がなされている。本課題では、アリストテレス倫理学におけるかれの道德知覚という考え方の解明、また、この道德知覚という考え方がもつ現代的意義に取り組んだ。その結果、アリストテレス解釈としても現代的論争においても、新たな視座や論点を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：Moral perception is an idea that Aristotle proposes in his Nicomachean Ethics. Today, this idea is situated in Virtue Ethics and there are various controversies on this subject. This research project worked on (1) Aristotle's concept of moral perception in his Nicomachean Ethics and (2) the contemporary significances that this idea may have. As a result, new perspectives and arguments were provided.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：アリストテレス 徳倫理学 道德知覚 教育 脳神経倫理学 宇宙

### 1. 研究開始当初の背景

「徳倫理学 (virtue ethics)」とは、個人に備わる「道徳的な性格」を道徳的な判断や行為の源泉とする立場である。これは、「原則・規則」を道徳性の根拠とする義務論や功利主義と対置される。そして、徳倫理学によれば、そうした「道徳的な性格」を備えた人は、個々の状況のもつ道徳的に注目すべき特徴を適切に知覚すること。「道徳知覚 (moral perception)」により、規則に頼ることなく道徳的に的確な判断を下し行為することができる。徳倫理学の始祖であるアリストテレス自身は、この「道徳知覚」を単に「知覚 (アイステーシス)」と呼んでいるが、現在では、他分野で通常意味される「知覚」との紛れを避けるため、「道徳知覚」と表記されることが多い。

1958年にAnscombeとFootが徳倫理学の観点から現代道徳哲学に対して批判をおこない、これが嚆矢となり、現在では、徳倫理学は義務論や功利主義と並びまたそれらと対峙する「規範倫理学の第三の立場」としての地位を確立している。なかでも、Wiggins (1975) や McDowell (1979, 1984) がアリストテレス倫理学の解釈を通じて「道徳知覚」という考え方を強力に論じたことにより、「道徳知覚」は現代徳倫理学のもつ最も重要な考え方の一つとなっている。それゆえまた、アリストテレス的徳倫理学のもつ現代的意義としても最も重要なものとされる。

しかし、「道徳知覚」をめぐるのは、「道徳知覚」が本当に知覚なのかどうか、徳倫理学説として道徳知覚はどれほど重要な理論的装置なのか、などさまざまな考え方が混在しているというのが研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

こうした現状をふまえ、本研究課題ではアリストテレスの「道徳知覚」の問題に注目した。そして、(1) アリストテレス倫理学における「道徳知覚」という考え方を検討し、(2) それを土台にして上述の現代的な論争やそのほか関連する問題を整理し解消することを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) アリストテレス倫理学における「道徳知覚」という考え方を検討方法としては、解釈研究をおこなった。解釈研究とは、古典的とされる人物や著作に対して、テキストの読み込みをおこない、二次文献、三次文献などのこれまでの研究の蓄積を網羅的にふまえたうえで、これまでの解釈の問題点を解消するような新たな解釈を提示することを通じて、そのテキストの「真意」を明らかにしようとする研究である。

(2) 現代的な論争については、現代徳倫理学に注目し、道徳知覚を唱える論者たちの論点とそれに反対する論者たちの論点の整理

をおこなうことで、論点の洗い出しをおこない、それにたいして有効な議論を提出するという方法をとった。また、狭義の哲学以外の知見や研究から導ける論点や議論などについても可能性を検討することにより、「道徳知覚」という考え方のもつ意義について考察するという方法をとった。

### 4. 研究成果

これまで、アリストテレス倫理学の解釈研究としての道徳知覚の研究と、現代徳倫理学研究としての道徳知覚の研究は、相互に言及されながらも、別の研究として取り組まれてきた。この状況に対して、本研究は、両者を注視しながら取り組むことにより、新たな解釈や論点、そして意義や展望を示すことができた(5. 主な発表論文等参照)。

また、「5. 主な発表論文等」には含まれないが、道徳知覚に大きな関心を向けている徳倫理学自体が我が国ではまだあまり知られていないため、研究者間の意見交流をつづけた知的関心の醸成にも取り組んだ。これは日本倫理学会において連続したワークショップとして企画したもののだが、課題期間内に実施したワークショップは以下の通りである。アリストテレス研究者のみならず、功利主義研究者、現代分析哲学研究者、医療倫理学者、医師など、多分野の研究者をまねき、道徳知覚をはじめとした徳倫理学のさまざまなトピックについて意見交換をおこない、課題や可能性について多くの有益な視座が提供されるとともに、本課題そのものにとってもさまざまな進展をもたらした。

- 1) ワークショップ「徳倫理学ワークショップ2 翻訳と展望」、日本倫理学会第65回大会、一橋大学国立キャンパス、2014年10月3日、立花幸司(企画&司会)、土屋茂樹(中央大学:提題者)、古牧徳生(名寄市立大学:提題者)、児玉聡(京都大学:提題者)
- 2) ワークショップ「徳倫理学ワークショップ3 生命・医療倫理学と徳倫理学」、日本倫理学会第66回大会、熊本大学黒髪北キャンパス、2015年10月2日、立花幸司(企画&司会)、門岡康弘(熊本大学:提題者)、伊吹友秀(東京理科大学:提題者)、中澤栄輔(東京大学:提題者)
- 3) ワークショップ「徳倫理学ワークショップ4 非アリストテレス的な徳倫理学(1)」、日本倫理学会第67回大会、早稲田大学西早稲田キャンパス、2016年9月30日、立花幸司(企画&司会)、早川正祐(三重県立看護大学:提題者)、相澤康隆(三重大学:提題者)

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

Koji Tachibana, "The Gap between Philosophy and the Philosophy of Education in Japanese Academia: A Statistical Survey of the Largest Competitive Research Funding Database in Japan", 『先端倫理研究』, 熊本大学人文社会科学研究所先端倫理学コース, 第11号, 2017年, pp. 17-32. (上記論文「科学研究費助成事業データベースを手がかりにみる我が国の教育哲学研究の在処」の内容を加筆修正して英語にしたもの。)(査読なし)

立花幸司, 「アリストテレス-幸福・労働・エンハンスメント」, 『POSSE』, NPO法人 POSSE, 第33号, 2016年, pp. 208-219. (査読なし)

立花幸司, 「哲学業界における二つの不在: アリストテレスと現代の教育哲学」, 『理想: 特集 アリストテレス-伝統と刷新』, 2016年, 第696号, 2016年, pp. 100-113. (査読なし)

立花幸司, 「科学研究費助成事業データベースを手がかりにみる我が国の教育哲学研究の在処」, 『Humanitas: 玉川大学人文科学研究センター年報』, 2016年, 第7号, pp. 107-118. (査読なし)

Eisuke Nakazawa\*, Keiichiro Yamamoto\*, Koji Tachibana\*, Soichiro Toda, Yoshiyuki Takimoto, and Akira Akabayashi. (\*equal contribution), "Ethics of decoded neurofeedback in clinical research, treatment, and moral enhancement", *American Journal of Bioethics: Neuroscience*, 2016: 7(2): 110-117. (査読あり)

立花幸司, 立花正一, 井上夏彦, 「宇宙行動科学の社会的意義と可能性: 有人宇宙開発と社会のよりよい関係のために」, 宇宙航空研究開発機構編『人文・社会科学研究所活動報告集 2015年までの歩みとこれから』, 2016年, pp. 101-123. (査読なし)

〔学会発表〕(計7件)

立花幸司, 「デイヴィッド・ロスについての一考察: 道徳規則と道徳知覚」, 西日本哲学会第67回大会、熊本学園大学、2016年12月3日

Koji Tachibana, "Space Neuroethics", 10th Annual Meeting of International Neuroethics Society, International Neuroethics Society, San Diego Central Library, San Diego, California, U.S., November 11, 2016.

Koji Tachibana, "Human Life and Ethics in Outer Space", SoCIA 2016: An Interdisciplinary Workshop on

Social and Conceptual Issues in Astrobiology, the International Society for the History, Philosophy and Social Studies of Biology, Clemson University, South Carolina, U.S., September 25, 2016.

立花幸司, 「道徳教育の可能性: 徳倫理学と経験科学の邂逅地点あるいは緩衝地帯として」, 日本倫理学会第66回大会、熊本大学、2015年10月3日

Koji Tachibana, "Decoded-Neurofeedback and the Ethics of Moral Bioenhancement", The 13th International Society of Utilitarian Studies, Session: Brain-Machine Interface and Human Well-Being Reconsidered, Yokohama National University, Kanagawa, Japan, August 21, 2014.

立花幸司, 「徳と状況」, 日本哲学会第73回大会、北海道大学、2014年6月29日

Koji Tachibana, "Moral Neuroscience and Aristotelian Practical Wisdom in the 21st Century", The 44th Annual Conference of the International Society for the Comparative Study of Civilizations, Monmouth University, New Jersey, U.S., June 12, 2014.

〔図書〕(計7件)

立花幸司, 「徳と状況: 徳倫理学と状況主義の論争」, 『モラルサイコロジー: 心と行動から探る倫理学』, 太田紘史編著、春秋社、2016年、第八章 (pp. 373-411)

アリストテレス 『ニコマコス倫理学』 (下) 渡辺邦夫・立花幸司翻訳、光文社古典新訳文庫、2016年

アリストテレス 『ニコマコス倫理学』 (上) 渡辺邦夫・立花幸司翻訳、光文社古典新訳文庫、2015年

ダニエル・C・ラッセル編『ケンブリッジ・コンパニオン 徳倫理学』立花幸司

監訳、相澤康隆・稲村一隆・佐良士茂樹翻訳、春秋社、2015年

立花幸司, 「弱さを認めて強くなる: 個人の有徳な倫理性に頼らない科学技術倫理学の構築へ向けて」, 『科学技術の倫理学』, 勢力尚雅編著、梓出版社、2015年、第五章 (pp. 123-152)

立花幸司, 「見えないものをみる: 徳倫理学の立場から考える防災の倫理学」, 『時間学の構築: 防災と時間』, 山口大学時間学研究所編、恒星社厚生閣、2015年、第八章 (pp. 191-221)

フィリッパ・フット著『人間にとって善とは何か 徳倫理学入門』高橋久一郎監訳、河田健太郎・立花幸司・壁谷彰慶翻

訳、筑摩書房、2014年

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等  
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

立花 幸司 (TACHIBANA, Koji)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：30707336

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし